

山口県田布施町 新規就農パンフレット

# 農と生きる。



土と向き合う。

農業を

なりわいに行っている人々の話

## TABUSE FARMER'S STORY

田布施町の農業者等インタビュー

就農までの道のり / 田布施町の概要



自然を受け入れて  
歩む日々を想像する。



山口県田布施町

この冊子は田布施町の農業に携わる人々の声をまとめて、  
「農」<sup>なりわい</sup>を生業にしたいと思う方にお届けするものです。  
人間は土があつてこそ作物を生み出すことができます。  
土地を拓き、草木を刈り取り、土を柔らかくする。  
種をまき、植物が育つ様子に目をこらす。  
風や空気を察知して収穫し、その年の成果を生きる糧にする。  
心地よい好天のときも、過酷な風雨にさらされるときも、  
仕事と暮らしの中心に田んぼ、畑がありました。  
「農」とは人間が意志を持って、  
大地に対して手足を動かす営みの表れと言えるでしょう。  
気まぐれな空の下、  
土地を耕し、何かを生み出す人々はたくましく、  
語られる言葉は魅力的に映ります。  
田布施町の「農」にまつわる声が、  
農ある暮らしに踏み出すきっかけになれば幸いです。

目次 .....

P.03	手を動かし続け、アナログの境地へ。	時永 進
P.05	ひとあしひとあし、確かに歩む。	田熊 享子
P.07	楽したら楽しくない、循環する楽農を。	福本 卓雄
P.09	失敗しようとも、その経験がいつか役に立つ。	岸田 訓和
P.11	鶴呑みにせず、自ら飛び込む。	村上 浩
P.13	食と農をつなぐ、よりよい食文化を育む場所。	協同組合 田布施地域交流館
P.15	就農までの道のり	
P.17	田布施町の概要	







02

ひとあしひとあし、  
確かに歩む。



主な栽培品目  
アスパラガス

あぐり a. 代表  
田熊 享子  
Taguma Akiko

PROFILE

田布施町出身。山口県立農業大学校の社会人研修を受講後、農業法人での研修を経て、平成27年度より認定新規就農者として独立就農。管内JAの南すおうアスパラガス部に所属し、パイプハウスでアスパラガス15aを栽培する。令和2年より田布施町認定農業者。



「正直な話、農業に小さい頃から親しんでいたわけでもないんですよ」田熊さんは淡々と就農に至るきっかけを話してくれた。実家のある田布施町に親族の農地こそあったが、これまでの仕事は地域情報誌の営業や事務職が中心。農業とはあまり関係ない日々を過ごしていた。きっかけはふとした偶然だった。「母の調子が悪いときに畑のことを頼まれたんですけど、そのときに畑で過ごした時間が本当に楽しかったんです、晴れていてすごく気持ちがよくて」昔の出来事を昨日体験したように話す、控えめな口調にも田熊さんの原点が垣間見える。

そんな折に、田熊さんは農業大学校の就農支援塾のチラシを見つけた。国の給付金がもらえて、技術も身につくなら、と



思い応募。県や役場の職員と相談して就農計画を立てながら、農大の社会人研修で農業の基礎知識を習った。受講後は管内JAに部会があり、売り先が見込めるアスパラガスを選んだ。田布施町の隣りでアスパラガスを栽培する農業法人に1年間通って研修を受け、技術を身につけた。その後、JAの事業を活用して親族の農地にハウスを設置、平成27年度から田布施町の認定新規就農者として就農した。経営を開始して7年目になるが、未だに試行錯誤しているそうだ。「美味しく育てるコツですか？私が知りたいですね、どこまで工夫できるのか…日々ちよとしたことが嬉しいし、残念に思うし。日々頑張ろう、目の前のことを！って気持ちです」

ほ場周りの草刈り、資材の整頓、アスパラガスの親木やハウスの管理など、多くの

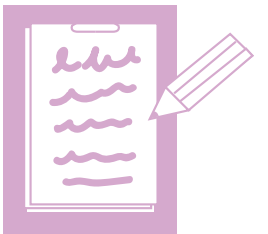
地道な作業がついて回るが、田熊さんのハウスの中は常に整理されている。「畑が綺麗な状態のときは気分よく、胸を張って出荷できます。自分の名前前で農作物を出荷すると、自分のしたことの影響が直に帰ってくる。消費者と近いと思うし、仕事の緊張感にもなる。それがやりがいですね」管内JAのアスパラガス部会は化学農薬低減、化学肥料不使用で栽培するエコやまぐち農産物認証を取得するなど意欲的だ。田熊さんも部会の一員としてJAの共同販売に出荷しながら、自身でも直売所を含めた販路を少しずつ広げている。「いいものを作っている自覚があるので、育てたアスパラガスを、より良く相手に届けられたらいいなと思っています」地に足をつけて歩みを止めない田熊さんの足跡には、人の心に響く何かがある。

COLUMN

新規就農に係る給付金と計画

田熊さんが受給された給付金は、現在は農業次世代人材投資資金(旧:青年就農給付金)と呼ばれ、次の農業経営者として地域の担い手を目指す若い世代の人に向けて、就農に向けた技術習得や就農直後の経営安定を支援するものです。受給要件には、自治体の認定新規就農者になることが定められています。その計画認定を受けるには向こう10年の

生産量と販売先、設備等資産償却や労働時間など、多くの経営要素を考慮した計画を立てる必要があります。行政と相談しながら、ご自身の望む農業経営を、できるだけ具体的に想像してみましょう。また、この給付金制度は国の政策の動向で制度内容が変わる可能性もあるので、注意が必要です。





# 03

## 楽したら楽しくない、循環する楽農を。



主な栽培品目

水稲（主食用・酒造好適米）

福本自然農園 代表

福本 卓雄

Fukumoto Takuo

### PROFILE

田布施町出身。県内の高校教員を定年まで勤めた後、平成22年から本格的に農業に取り組む。現在、無農薬・有機栽培で食用米・酒米合わせて900a栽培。山口県内の酒造会社と契約栽培する酒米は、デパートのプライベートブランドに採用されるなど人気を博す。平成27年に有機JAS認証を取得以降、町内外で有機JAS普及活動を行う。田布施町認定農業者、農業委員会委員。



福本さんは自身の弟さんが化学物質過敏症であることをきっかけに、化学肥料や農薬を使わない食料生産について関心を持つようになった。そのため、定年退職後の農業経営は、有機栽培と心に決めていた。「本当に安全な米を提供したい気持ちに加えて、自分が生まれ育った里山の環境や景観を維持したい、と強く思っていました」教員時代の縁で、ある酒造会社の社長と懇意だったこともあり、酒米栽培の道へ。県内の酒米農家に足を運び、栽培方法を学ぶも、当初は収量も米の等級も安定しなかった。酒米は丈が高く倒れやすい上、品質が悪ければ引き取ってもらえない。加えて有機栽培となれば、さらにハードルが高くなるが、信念は揺るがなかった。「除草剤を撒き、害虫を防除して収量を上げる、という考えを私は採りません。微生物が豊かに共存する手



法で、稲自身の育つ力を尊重しようとしました。教育と同じだと思います。収量は下がりますが、品質は格段に良くなります」

海藻や鶏糞を用いるなど資材の工夫を重ね、栽培のノウハウを確立した後は、特等の酒米を契約蔵に提供するようになった。農地の有機JAS認証を受け、栽培管理を徹底することで、お米の引き合いも多くなった。「あるとき、酒造会社の杜氏が東京から興奮気味に電話してきました。私の酒米で醸した純米大吟醸が、国内有数のコンペで一位になったと言うのです。お互いにいいものを目指す酒造会社との信頼関係が実を結んだのは、本当に嬉しかったですね」

今後は自身の経営の法人化と、有機農業の普及を見据える。長い道のりだが、福本さんは焦ることなく大きく構えている。「ゴールばかり見ている心が折れる。自分でやって課題を見つけて、思いついたアイデアを試すのが面白いんです」福本さんが借り受け

る大半の農地は当初、人の背丈ほどの草木が繁茂して藪のようだった。水路の復旧から伐根、草刈といった重労働を重ね、見事に600aの耕作放棄地を生命力あふれる稲穂が風になびく元の水田に戻した。その原動力は、幼少期の体験にあるという。「遊ぶと言ったら外を駆け回って、れんげ畑に寝転んで空を見るのが、とても記憶に残っています。そんな体験ができる地域を、次の世代にも残したいのです」多くの課題と向き合う度に乗り越えてきた福本さんは、自身の農業を「楽農」と語る。「楽したら（手を抜いたら）、楽しくない。大変な作業の中で土と触れ合う、その先の収穫の喜びをみんなと分かち合う、そういう場を創っていきたいです」福本さんの循環する米作りをきっかけに、世界のユニークな人たちが集い、有機的につながってきた。志ある、苦楽を共にできる仲間と農業を介して会えることを、福本さんは心待ちにしている。



### COLUMN

#### 有機農業・環境保全型農業

国の事業でも化学肥料・化学合成農薬の使用を低減し、地球温暖化防止や生物多様性保全等に効果のある営農を行う農業者に対し、耕作面積に応じた交付金を支払う制度が運用されています。山口県では化学農薬・化学肥料不使用栽培（または使用量50%以上低減）の農産物等を「エコやまぐち農産物」として認証する制度を設けています。





04

失敗しようとも、  
その経験がいつか役に立つ。

主な栽培品目

水稲（主食用・飼料用）・麦・大豆



葛岡・瓜迫農事組合法人従業員  
岸田アグリサポート 代表  
**岸田 訓和**  
Kishida Norikazu

PROFILE

広島県出身。自動車整備士を経て、農機具メーカーの整備士に転職、妻の実家である田布施町に転居。町内にある葛岡・瓜迫農事組合法人の作業を手伝って、令和2年に同法人に就業。農作業の傍ら、自身の技術・経験を活かし農機具整備業を個人事業主として開業。趣味は釣り、時間のあるときに瀬戸内海を満喫している。



「小学校のときからね、スクラップ屋さんで壊れたバイクがあったらそれをもたらってきて自分でバラバラに分解してみたり。親は絶対怒らなかったですね」岸田さんは幼少期を思い返す。小さい頃から機械に触れ、好きが高じて工業高校から整備士の道へ。昼夜問わず働くその裏で、いつか農業で生計を立てていけたらと思っていた。母方の実家がもともと専業農家であり、家族と作業を手伝った子供の頃は農業に対し、いいイメージしかなかったそうだ。そんなとき、田布施町出身の奥様と出会う。「妻の実家が田んぼを作って暮らしていたのが小さい頃の体験と重なって、楽しい記憶が蘇ったんです。海も近かったし、ここに住みたいな、と思って」そんなときに整備士の仕事を紹介され、農機具



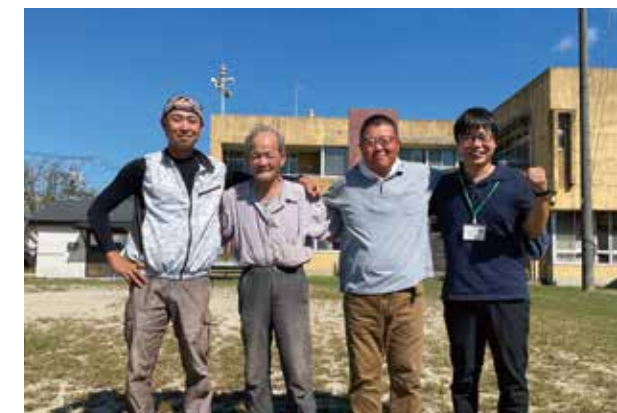
メーカーに転職し、拠点を移した。現在の農業に欠かせない機械を介して、農家さんとコミュニケーションを重ねてきた。年々休耕田が増えていくのが気になっていたところ、町内でほ場整備を機に葛岡・瓜迫農事組合法人が立ち上がる。近所だった岸田さんは同法人代表の岡本さんに相談して作業を手伝うようになり、そのまま就業。整備士のキャリアを活かして農機具修理の自営業で、農家さんのお手伝いをする。「農業といっても作物、面積、栽培方法、いろんなスタイルがあります。農業したい人に対しての就農フローはあると思うんですけど、農業のスタイルは一つじゃないから、まずは飛び込んで、自分のスタイルを探すことをお勧めします。僕自身は農業を通して、土地も守っていくスタイル

が好きです。土地が荒れていったら崩れたりしますが、農業には治水を含めた役割があり、それが国土を守ることに繋がると思うんです」岸田さんはここまでの道のりの決め手となった考えを、話してくれた。「将来的に何かこうビジョンが見えるものがあれば、どんどんやった方がいいですよ。今の人って失敗が嫌だし、投資っていう感覚がないと思うんです。100%を目指してやって、失敗して30%しかできなかったら、今の人は70%損したと思うんです。けれどその30%の経験や成果は、また別のところで生きるときがある。その先行投資の考え方で自分は今、食べていけていると思います」幼き日々自らバイクに触った原体験は、巡り巡って田布施町の農業を支えている。

COLUMN

ほ場整備と集落営農法人

田布施町では耕作放棄地を解消するため、平成23年度に国の事業採択を受けてから、ほ場整備工事を進めています。不整形な農地の区画整理と併せて、用水路、排水路、農道等を一体的に整備して農業者が耕作しやすい農業環境を整えています。岸田さんが所属する葛岡・瓜迫農事組合法人は、集落内の農業者や土地の所有者の共同出資により立ち上がった、農業を営む会社です。田布施町では生産基盤が整備された農地で米、麦、大豆といった作物に取り組む法人が多いです。



▲法人のメンバーと役場の職員との一枚。定期的に作業や経営について意見交換する。